

アワビ類資源管理のすすめ

長崎県総合水産試験場
漁業資源部 栽培漁業科

アワビ類は、素潜りやほこ突きなどの漁法で漁獲されている重要な磯根資源のひとつです。長崎県におけるアワビ類漁獲量の推移を農林水産統計で見ると、昭和 57 年の 763 トンをピークに減少を続け、平成 11 年には最低の 240 トンとなりました（図 1）。このアワビ類資源の回復を図るために、各地先において早急に資源管理の取組を始める必要があります。

アワビ類資源管理方針

アワビ類資源管理の取組として「とりすぎない」、「小型貝の保護」、「産卵親貝の保護」の 3 つがあります。また、「密漁対策」も大きな問題となっています。

「とりすぎない」

アワビをとりすぎないためには、資源状態を把握し、再生産を考慮した操業規制（漁獲量規制、操業時間制限等）が有効です。資源状態の指標として、アワビ殻長の平均値を求め、ある地区の事例について漁獲量と平均殻長の推移を示しました（図 2）。これによると漁獲量の減少と平均殻長の小型化がほぼ一致しており、アワビ資源の現状維持のためには小型化に注意した漁獲が必要であることを示しています。さらに以前のアワビ漁獲量を取り戻すためには、その当時の漁獲平均殻長まで引き上げることが必要となります。このためには、完全休漁が最も効果的ですが、過去の漁獲平均殻長を目標として、操業規制を図りながら徐々に漁獲アワビの大型化を図ることが現実的には可能でしょう。

アワビの大型化が図られれば、アワビ産卵量の増大（再生産効果）にも大きく貢献します。

「小型貝の保護」

アワビの小型貝を保護するためには、漁獲制限殻長の引き上げが効果的です。ある地区では、クロアワビを 11cm、メガイアワビを 12cm に引き上げている事例もあります。この方法は、実施した年は若干漁獲量が減少しますが、次年度からは現状を上回る漁獲量が期待されます。さらに小型貝が産卵資源

として残される効果があります。

アワビ類は、浮魚にみられるような爆発的な資源増大は期待できません。したがって、アワビ類の成長を最大限に活用するため、小型アワビを採らないことが大切です。

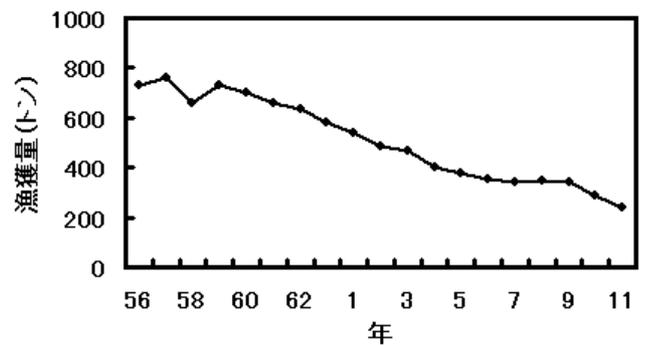


図 1 長崎県におけるアワビ類漁獲量の推移（農林水産統計）

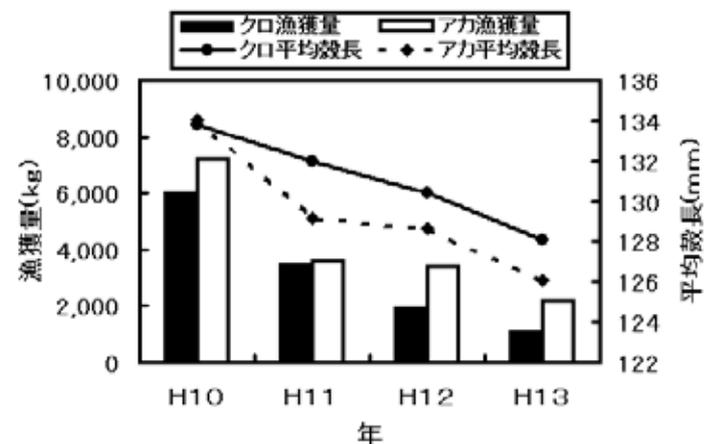


図 2 代表地区における漁獲量と平均殻長の関係

「産卵親貝の保護」

アワビ産卵親貝を保護するためには、アワビが高密度に分布する禁漁区・管理漁場の設定が有効です。

近年のようにアワビ資源が減少し、漁場の分布密度が低い場合、移動範囲の狭いアワビでは雄雌の出会いが少なくなっていると考えられます。オーストラリア産アワビの例では、雄雌間の距離が 1.6m 離れると受精率が 50% 以下となる報告があります。

日本のアワビでも親貝の密度と再生産の関係が調査されており、アワビが増えないのは親貝の減少により再生産能力が低下しているためと考えられています。そこで、再生産が減少した地域においては1カ所でも多くの禁漁区・管理漁場を設置し、産卵親貝が高密度に分布する場所(資源増大の最適ゾーン)を確保することが肝要です。先進地区では地先型増殖場をアワビ管理漁場に利用した例がありません。

禁漁区・管理漁場は、設定範囲が比較的に狭いため種苗放流、磯焼け対策、密漁対策、害敵駆除等の管理が効果的に行えます。従って、資源状態を把握した最適漁獲を共同作業で行うことで、資源管理に必要な活動資金も確保できます。

また、管理漁場として築堤式アワビ養殖漁場を設置する方法も考えられます。天然の磯を網で仕切り、アワビの種苗放流・害敵駆除及び天然海藻の増殖を実施することで、大型アワビの間引生産と近隣漁場への再生産効果が図れます。

「密漁対策」

アワビ資源管理に取り組んでも、「密漁に盗られるから一緒」「密漁に盗られるくらいなら自分たちで捕ろう」という声を浜でよく耳にします。密漁は自己管理できませんが、あきらめたら資源管理はおしまいです。そこで、密漁監視体制を地元で整えることが必要です。

おわりに

アワビ類の資源管理は、上記のすべてに取り組むことが理想ですが、各地先の事情や資源状態により漁業者自らが取り組み手法を選択し、取り組まなければいけません。

アワビは、1年で乱獲されますが、資源回復には4年以上の時間が必要です。「**海女の建てたる蔵はなし**」と言われるようにアワビで一攫千金を得るのではなく、子々孫々までアワビが持続的に漁獲されるよう資源を大切にしていけることが必要と考えています。

(担当 渡邊庄一)